

津田塾大学審査学位論文（博士）

論文要旨

津田塾大学大学院国際関係学研究所

後期博士課程 寺本めぐ美

本稿の目的は、オランダに居住し、トルコに出自を持つクルド系住民の活動や意識を、中東やヨーロッパにまたがる重層的な構造と関連させながら明らかにすることである。クルド系住民を取り巻く構造として、以下の三点がある。

第一に、出身地域における「クルド人問題」、さらには定住先におけるトルコ系住民とクルド系住民の関係性が、クルド系住民の意識形成に影響を及ぼしている。歴史的にクルド人が居住してきた地域は、第一次世界大戦後、トルコ・シリア・イラン・イラクの各国に分割された。本論文では、クルド人が中東各国で経験してきた同化政策、差別や抑圧といった問題、さらには、分離独立や連邦制、自治権の拡大を目指すクルド人の運動と各国政府の対立を「クルド人問題」として捉える。

ヨーロッパ各国に定住したクルド系住民の活動やアイデンティティの考察は、社会統合や言語・教育問題といった他の移民・難民研究で取り上げられてきた諸事例と共通した研究課題を有する。しかし、クルド人は「独自の国家を持たない最大の民族」であり、出身地において同化政策の対象となると同時に、差別や抑圧を経験してきたという特色を持つ。

第二に、受け入れ国における移民政策と、クルド組織や人々との関係がある。1990年代から2000年代の初めに発表された、西ヨーロッパにおけるクルド系住民の活動に関する研究は、各国において策定される移民政策が、クルディスタン労働者党 (Partiya Karkerên Kurdistan: PKK) やクルディスタン社会主義者党 (Partiya Sosyalîst a Kurdistan: PSK) といったトルコのクルド政党と関係する組織やクルド系住民の活動に与える影響を等閑視してきた。PKKはトルコからの独立を要求し、次第にトルコ国内での連邦制という路線へ軌道修正する。PSKは当初から連邦制を目指した。

オランダ政府は、1980年代に多文化主義政策を採用した。1990年代以降には、多文化主義から舵を切り、移民をオランダ社会の「市民」として統合することを重視した。しかし、オランダでは、1990年代以降にも地方自治体のレベルにおいては多文化主義が残存し、移民組織への財政支援が積極的に行われてきたという特徴を持つ。

第三に、近年の国際情勢を視野に入れた分析が重要となる。クルド系住民の活動や意識を考察するにあたっては、2001年に発生した「9.11」という事件とそれに関連する様々な出来事が、移民政策やクルド系住民にいかなる影響を与えたのかという点の考察が必須である。「9.11」以来、西ヨーロッパでも「イスラーム嫌い」(Islamophobia) が蔓延し、その多くがムスリムであるクルド系住民の活動や意識に影響を与えてきた。さらにトルコのEU加盟交渉は、オランダに居住するクルド系住民が互いに連携し、クルド人としての意識を共有する一つの契機になっている。

クルド系住民の活動として、具体的には、オランダ・クルド連合（Federatie Koerden in Nederland : FED-KOM）とクルド労働者連盟（Koerdische Arbeiders Unie : KOMKAR）、これらの組織に参加するクルド系住民第2世代の活動を中心に取り上げる。FED-KOMは、PKKに共感する政治難民が中心となって1993年に設立した組織である。PKKがヨーロッパで築いたヒエラルキー構造に組み込まれ、オランダ各地の関連組織を傘下に収める。FED-KOMは、オランダのクルド組織の中で最大のメンバー数を誇る。KOMKARはPSKの支部としての役割を果たす。ハーグにのみ拠点をおくため、オランダ全土に関連組織を擁するFED-KOMほど規模は大きくない。しかし、トルコ出身者を中心とするクルド組織としてはFED-KOMに次ぐ規模であり、1980年代から活動を継続してきた。

FED-KOMやKOMKARの活動に参加するクルド系住民第2世代は、クルド人としての意識を維持し、「クルド人問題」に強い関心を抱いてきた。こうした人々に注目することによって、出身地における差別や抑圧、政治的展開を反映したトルコ系住民との関係性に影響を受けてきたというクルド系住民の特色を照らし出すことができる。他方で、第2世代は、オランダの移民政策の影響も受けてきた。1990年代以降の統合政策は、オランダ語能力や学歴の向上、労働市場へのアクセスの改善といった、移民・難民の社会経済的上昇を重視した。本稿が焦点をあてる第2世代は、オランダ語や英語を流暢に話し、オランダで高等教育を受け、専門職に就いている。こうした、統合政策の「模範生」とも言える第2世代は、トルコ系住民との関係性やオランダの移民政策といった、送り出し地域と定住先の両方における変数を背景として活動を展開してきた。

本稿は、2011年9月、2012年8～9月、2013年3月、2014年3月、2015年3月、2015年9～10月に行われた現地調査に基づく。第1世代であるFED-KOMメンバー（1名）、KOMKAR代表者（1名）、KOMKARメンバー（1名）、クルド政党から距離を置くクルド組織代表者（1名）、クルド系住民第2世代（11名）にインタビュー調査を行った。クルド系住民以外へのインタビューは、トルコ系イスラーム組織の代表者と事務局長の2名、ハーグ市役所「シティズンシップ」プログラム担当部局担当者4名に対して行った。

また、FED-KOM関連組織やKOMKARが主催する、新年を祝う祭りネヴローズ(Newroz)や、PKKに共感するヨーロッパ各地の組織が主催し、ドイツで行われたクルド・フェスティバル、オランダで行われたデモ活動などでの参与観察も行った。さらに、オランダ政府やハーグ市をはじめとする地方自治体が刊行する資料に加え、クルド組織が発行する活動報告書や雑誌、パンフレット、現地の新聞記事を一次資料として用いる。

KOMKARやクルド系住民第2世代は、前述の重層的な構造の中で、オランダ社会への統合を重視すると同時に、PKKやPSKの標榜する「クルド・ナショナリズム」に共感してきたという特徴を有する。KOMKARは、PSKの支部としての役割を果たすと同時に、オランダ社会への統合を重視してきた。その背景には、主に前述の「9.11」という世界的状況やオランダにおける統合政策の影響がある。「9.11」を契機として世界中に「イスラーム嫌い」が蔓延する状況下では、KOMKARというイスラームを標榜しないクルド組織でさえも、

名誉殺人や家庭内暴力を撲滅するための活動を行わなければならなかった。

また、1990年代以降の移民政策において、オランダ政府は、マイノリティ集団への支援ではなく、集団から切り離された個人を「市民」として統合することを重視した。こうした統合政策の下で、KOMKAR が拠点をおくハーグ市は、移民・難民組織に対して、独自の文化の維持ではなく、「市民」としてハーグの文化的多様性に貢献することを求めた。

KOMKAR は、政治・社会参加、地域交流などに関する活動を積極的に行うことで、ハーグ市からの財政支援を獲得することに成功している。

他方で、FED-KOM は統合政策への対応よりも、PKK の政治的運動と関連した活動を重視していると考えられる。2011年に、アムステルダム市は、PKK との結びつきが疑われる FED-KOM 関連組織への財政支援を停止した。財政支援の停止後も、FED-KOM が活動方針を変更することではなく、統合政策への対応に積極的ではなかったと言える。

前述のように、本稿が扱うクルド系住民第2世代は、全員がオランダで高等教育を受け、専門職に就く人々である。またオランダ語や英語を流暢に操る。インタビュー調査の結果は、こうした第2世代の中に FED-KOM や関連組織の活動を支える者が存在することを明らかにする。比較的高い社会経済的地位を達成する人々が、社会への統合よりも PKK の政治的運動と関連した活動を重視する FED-KOM や関連組織の活動に参加しているのである。

クルド系住民第2世代が、PKK の推進する「クルド・ナショナリズム」に共鳴する要因として、トルコにおける歴史的経緯や政治状況による影響が挙げられる。第2世代は、オランダでの生活の中で、トルコ系住民からのステレオタイプや優越的な意識に基づいた差別に曝されてきた。クルド系住民第2世代は、トルコ系住民から「テロリスト」や「山岳トルコ人」といった差別的な意味合いを含んだ言葉を浴びせられた経験を持つ。また、クルド人特有の名前に関して「なぜトルコによくある名前にしないのか」と言われたことを、第2世代はトルコ系住民による優越的な意識に基づいた差別として感じ取っている。

さらに、トルコ政府と PKK の対立といった政治状況は、オランダにおけるクルド系住民とトルコ系住民の間での衝突を招き、両者の関係を悪化させてきた。トルコ系住民との関係性の中で自身がクルド人であることを意識せざるを得ない状況に置かれることは、第2世代が「クルド・ナショナリズム」に共感する一つの契機となってきたのである。

ただし、クルド人であることを意識することは、FED-KOM や関連組織の活動への参加と直接結びつくわけではない。第2世代が PKK や FED-KOM の活動に魅力を感じる要因として、PKK の武装闘争を肯定的に評価していることに加え、FED-KOM や関連組織が第2世代の直面するアイデンティティの危機の打開や自己実現の場といった役割を担ってきたことが挙げられる。さらに、政治難民としてオランダに渡った親世代からの影響も強い。

(3988 文字)